

支援の継続

—「万石浦ライオン学校」開校—



修学旅行を区切りと考えていた万石浦避難所の子ども支援ですが、子ども達の変化に会い、それらがかれらの中にある程度定着するまでは、何らかの支援活動を継続する必要があります、そんなことが支援者の間で話題になっていました。もちろん、今まで通りでもない、それでいて、かれらの自立への歩みを助ける支援の形とはどのようなものか、そんなことを模索するための支援が、8月中旬に2回行われました。1回目は、修学旅行が終わった週末、「修学旅行を振り返ろう」というテーマで、私たちとかれらとの関係の象徴にもなった「修学旅行のしおり」に写真を貼ったり、作文を書いたりといった活動でした。2回目は、子ども達の夏休みが終わる直前の平日3日間で「夏休みの宿題を終わらせよう」というテーマでした。この4日間を通しての実感、子どもそれぞれの確実な成長です。支援を始めた頃の「暴力」は、すっかり影を潜めました。その代わりに、「遊ぼう」と大人や友達を誘い、「入れて」と仲間に加わり、というように「言葉」を使って、自分の居場所を作ることが増えてきました。写真は、スポーツに疲れた子どもたちと支援者で行われていた棒倒しです。



「昼食」の時間にも変化が見られました。避難所に多くの子どもがいる頃は、昼食を食べる／受け取ることは比較的容易でしたが、それぞれの子供たちが、自宅や仮設で生活するようになると、昼食を食べないまま支援場所に居続け、結局支援者が食べ物を提供することが多くなっていました。そんな様子をうけて、宿題支援の3日間は、お昼にご飯を一升炊いて、みんなでおにぎりを作って食べることにしました。「うまいのかのだろうか」という支援者の心配をよそに、子どもたちは、自分のお気に入りの具を入れておにぎりをつくり、みんなで「いただきます」をして、本当に落ち着いて食べることができました。修学旅行の時の食事の時間が再現されたように、みんなが席に着くま



で待って、号令をかって出た子の「いただきます」にあわせて「いただきます」です。そんなかれらの変化を見せられて、宿題支援の隊長となった松永先生は「万石浦ライオン学校を開校しよう」と子どもたちに話し始めました。月に1回3月まで、勉強とお楽しみ会を組み合わせる活動を提案したところ、さっそく「話し合い活動」が始まりました。子どもたちはいろいろなやりたいことを次々に提案します。それもちゃんと手をあげて。誰も、他の人の発言を妨げるようなことはしません。そして、黒板右半分一杯に書かれたやりたいことを、今度は似たもので集めていく作業もできました。松永先生は、9月3・4日に訪問すること、それまでに「万石浦ライオン学校」の計画表を作ってくる約束をしました。そんなわけで、24日夜には、これまで万石浦支援に関わった支援者で、今後の支援活動の

計画を練ることになりました。

【「トラブル」を越えて成長する子どもたち】

もちろん、8月支援ののべ4日間が決して平穏だったわけではありません。いくつものトラブルがありました。泣いたり、怒ったり、拗ねたりと、それぞれの子供たちのいろいろな表現がありました。しかし、子どもたちはその「トラブル」を越えることで、またひとつ成長していっているように見えました。

夏休みの宿題帳がたくさん残っていった小学5年の男の子は、宿題支援の2日目、宿題がなかなか終わらなかったため、午後に計画された遊びに加われなくなる可能性を察知し、答えを写し始めました。それをみた支援者は、「自分のためにならない」ということを話し始めましたが、何回かのやりとりの後、かれは宿題を片付け、帰り支度して教室を出て行きました。支援者はきっと戻ってくるだろうという予想のもと、彼の行動を静観していました。その後、しばらくして彼は戻ってきたのですが、彼の手には電気ポットがあり、窓から教室に向かって、「カップ麺、買ってやっから！食べたいやつは来ーい！」と叫んだのでした。教室はちょうどおにぎりの準備にさしかかったところでした。2人の男の子が、その言葉につられてよってきます。こんな時は、大人の出番です。「やめなさい。」その後、かれと話しました。おごる／おごられる中で、友達をつかってほしくないと思っていること。おごろうとしているお金は、おとうさん、おかあさんが苦しい中で、あなたに渡しているものであること。力をつけて、ちゃんと稼げる大人になってほしいから、宿題の答えを写すことに注意を受けたこと。それらの話しを、かれは黙って、目に涙を浮かべながら、じっと聞いていました。次の日の支援、かれは残った宿題を、黙々と答えを見ずにやり抜いていました。かれがまたひとつ何か力をつけたような気がしました。

前号にも書いた気になる小学6年の女の子も4日間のフル参加でした。修学旅行の「ふりかえり」の時の目標も実行できているようでした。「よかった」と思う一方で、そこに大きな落とし穴があったことにも気がつきました。彼女は、これまでの支援の中でも、よく大きな声を出してきたのですが、実は、その大きな声はある方向性を持っていたということにわかりました。今回の支援で、彼女のノート、小学5年の男の子がわざわざ持ってきてくれるという場面がありました。ところが、彼女はそれをただやり過ごしたのです。「ありがとう？」という支援者の問いかけに、彼女はただ黙り込むだけです。そういえば、いろいろな思い返してみると、彼女は、人を揶揄するような友達の小さな声や、大人が子ども批評する声、そんな否定的な人の声を拾って拡声器のように声を出しているということ。そして、そうでない声があるとすれば、小学2年の男の子と関わっている時だけであるということにも気がつきました。そうです。彼女は同年代の子供たちとの関係が閉ざされているのです。修学旅行の支援の中で彼女は泣いたのですが、今回も彼女は2回泣きました。その1回は、一緒に勉強をしていた小学3年の

男の子に「●●って、すげー、俺なんか、そんな難しい問題できないよ」と言われた時だそうです。そして、もう1回、「自分のことを大きな声で説明しよう」という目標をたてて「●●なら、できる」と支援者に励まされた時でした。彼女と同世代との関係をどのように取り持っていくのか、これも今後の支援の課題です。

子どもが成長していくのにあわせて、支援者側の問題もはっきりしてきています。今回の支援の問題は人手が足りなかったことです。そのために、2日目に来たこだわりの非常に強い小学5年の男の子は、とうとう居場所を見つけられずに、2日目の午前だけで姿を見せませんでした。こだわりが強いですから、教室にいれば、いろいろなことがすぐにトラブルにつながります。しかし、それをフォローするだけの余力が支援者になかったことは事実です。支援の手が余るぐらいがちょうどいいとあらためて確認しました。

【避難所の変化】

今回の支援を通して大きな変化を感じたのは、子どもたちだけではありません。避難所の雰囲気もずいぶん変わったように感じました。というのは、子どもたちが外で遊んでいると、それに加わって、子どもたちと遊んでくれる大人が現れるようになりました。クーラーボックスを持ち込んでいることを知っている方は、毎朝、カチンカチンに凍った保冷剤を届けてくれるようになりました。かなり高齢のおじいちゃん2人が教室を訪問して、「何しに来たの？」という子どもたちの声に、「みんなの様子を見に来たんだよ」と答える場面もありました。避難所で生活するお父さんが、知り合いの子どもを連れてきて「この子も面倒みてもらえないか」と相談されることもありました。

避難所と教室は渡り廊下でつながっていますが、支援者にとって、避難所はとても敷居に高いところです。もちろん、避難している人たちが、段ボール1枚でプライバシーを保って生活する場なのですから、敷居が高くて当然だと思ってもきました。しかし、今や避難所の残されている人は、ずいぶん少なくなりました。きっと不安だったり、心細かったりしているだろうと想像できます。けれど、その残された人々が、子どもたちの支援活動をする私たちを見守り手助けをしてくれる、そんな雰囲気がありました。支援者が少なく、活動は一杯一杯だったわりには、これまで話をしたこともなかった避難者の方をお話をする機会もありました。神奈川から来ていること、毎週末来ていたこと、今後も月1回ぐらいで継続するつもりであること、そんなことを話すと、自分のお子さんが来ているわけでもないのに「よろしくお願いします」と頭を下げられる、そんなこともありました。残された避難所の方々と子どもたちをつなぐ仕組みを考えてもいいのではないかと、そんなことを考えさせられた4日間でした。

【集団遊びー粘り強さの成果】

変化したのは、被災地域の人々ばかりではありません。今回の支援の主力となったのは、東京理科大学の今井さん、大林さん、甘利さんという3人の学生で、これまでも最も多く万石浦支援に関わって来ているメンバーです。宿題支援の隊長の松永先生からは、「2日目の午後と3日目の午後は、大学生に任せるから、みんなで遊べる「集団遊び」を企画してみてください」



との話しがありました。少しずつ集団活動に慣れてきているとはいえ、小2～小6までの男女あわせて10人近い子どもたちを、みんな参加して遊ばせることができるのか、なかなか手強い課題であったような気がします。宿題支援の初日、松永先生から3日間の予定が提示されて「集団遊び」という話があった時には、5年生の男の子を中心に「野球をしよう」で盛り上がり、チーム編成まで子ども主導で決まってしまうました。ただし、女の子と運動が苦手な子は抜かされています。こんなに盛り上げてしまって、大丈夫だろうか？と、年配支援者は心配していたのですが、粘り強く「みんなで遊ぶ」という条件を提示して説得を重ねたようです。その結果、できました、できました、氷鬼、そして、手つなぎ鬼。最初は参加できていなかった運動の苦手な子どもも最終的には参加です。そして、そこからルールを少しずつ複雑にしていく。子どもたちはそれにもついてきます。松永隊長からは「あっぱれ大学生！」そんな言葉も聞かれた支援でした。

【支援隊活動記録 8月1日～8月21日】

■陸前高田支援 ※陸前高田の支援報告は次号に掲載します。

○8月12日～14日(第19回)

モビリア仮設住宅の子ども支援(すたんどばいみー)

今後の支援の相談(小友中学校加藤校長、モビリア仮設住宅支援関係者)

○8月18日～21日(第20回)

モビリア仮設住宅の子ども支援(すたんどばいみー)

第三回モビリア仮設住宅支援連絡会参加

□支援隊メンバー:柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水陸美(東京理科大学)、馬場貴司(玉川大学生)、金子尚弘

すたんどばいみー:チューブサラーン・宮脇英理・劉麗鳳・長畑シゲミ・伊藤瑞姫・馬場有希(西鶴間小学校)

■石巻市万石浦の子ども支援

○8月7日(第12回)修学旅行のまとめ支援

○8月17日～19日(第13回)夏休みの宿題支援

□支援隊メンバー:松永雅文(大和市特別支援教室)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水陸美(東京理科大学)、柿本隆夫(引地台中学校)、荻谷夏子、金子尚弘、今井美里・甘利悠貴・大林沙紀(東京理科大学)

■ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 8/1～8/21

スマレ座(山口)、権田和子(元中学校教諭)、あじさい倶楽部、竹中亮子、大野かよ、堀健志(東京理科大学)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中心林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

